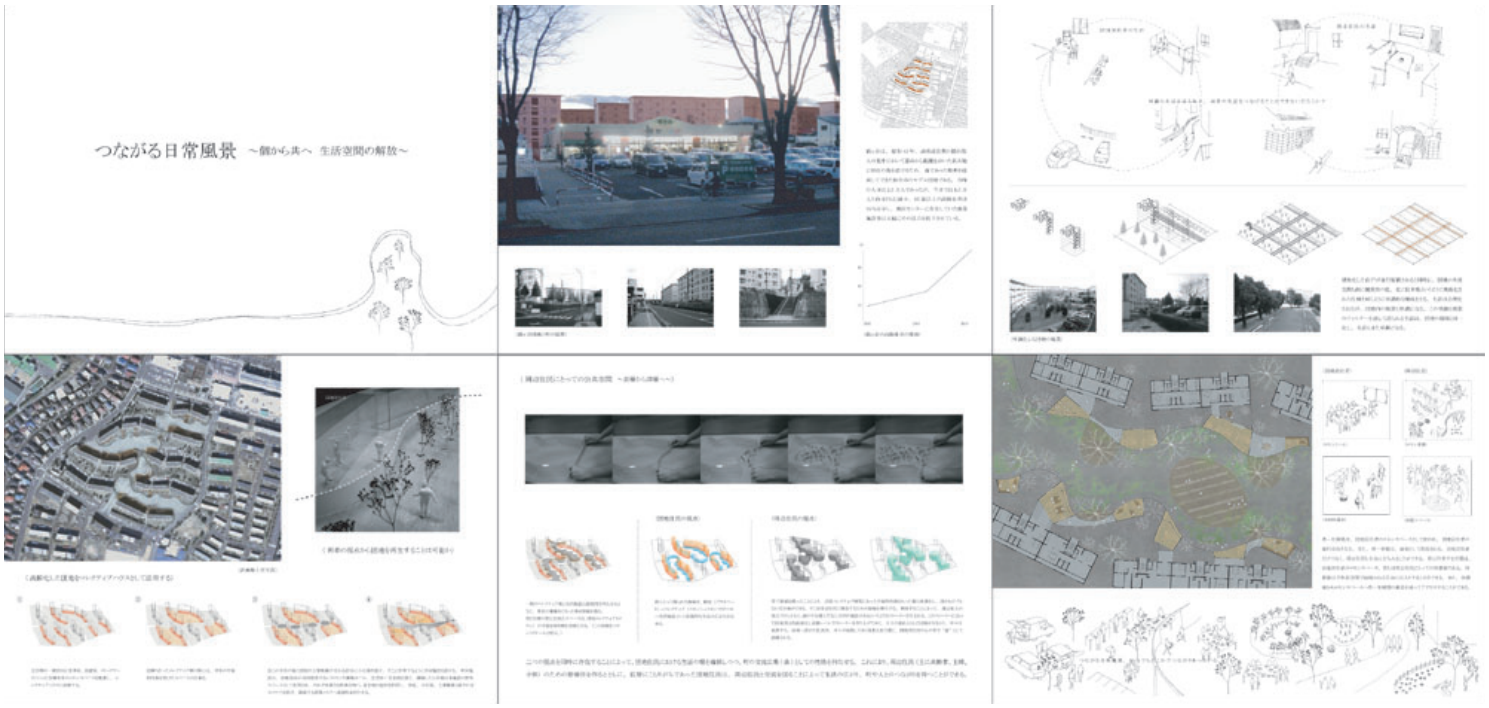
団地再生卒業設計賞 奨励賞

「つながる日常風景」

–個から共へ　生活空間の開放–

山田　祥平
宮城大学



団地の外部空間とその周囲の街との関係を問い直し、両方の住民の新しい出会い方をテーマとした作品。団地の外周部の境界線を住棟の隣棟間に引き込むという、シンプルでわかりやすいデザインに焦点を絞ったことで、提案が明快となった。高齢化や人口減少は、こうした郊外では何も団地内に限られたことではない。団地内の隣棟間隔確保の結果である見るだけの外部空間を地域の資産ととらえて、そこにアクティビティを生み出す仕掛けとしての諸機能を導入しているわけだが、提案内容が大げさになっていないことがリアリティにつながっている。（小嶋一浩）

概評

内田 祥哉

今回は前回（第六回）に比べ、応募者も慣れてきたように見えた。

審査員も、毎年一人が交代する三年の任期のシステムが安定してきた。そこで、審査の視点も急激には変わらないが、徐々に変化している。初期の頃は、再生の内容がハードな面に集中していたが、最近は居住の仕方に目が向き、今回は団地の生活と、周辺居住者との関係が注目されるようになった。それは、応募側にもその意識があることの反映であるが、社会的にも、この問題が注目されているからだろう。それは、何れは町並み保存などにも関係があり、社会現象としての集住が、自然現象に近い安定した居住形態を形成する過渡の問題でもあると理解すべきかも知れない。